

聖書：創世記 26：12～33

説教題：主があなたとともにおられる

日時：2024年1月7日（朝拝）

イサクの信仰について集中的に記している創世記第 26 章。この章の特徴はアブラハムの時に見た出来事と非常に良く似ていることです。ほとんど同じことが書かれているのではないかと思うほどです。もちろん細部においては色々異なるところがあります。しかしこうしてイサクは父アブラハムの足跡に従って歩んだということをこの創世記 26 章は全体として語っています。神の契約を担う二代目として、先代のアブラハムに倣い、彼を映し出すような歩みをしたのです。

前回は飢饉が起こったためにゲラルのペリシテ人の王アビメレクのもとに行った時のことが記されました。エジプトへ下ってはならないとの主の命令を受けてイサクはその地にとどまりましたが、そこでアブラハムと同じ罪を犯してしまいました。妻リベカが美しい女性だったため、彼女が自分の妻であると明らかにすると自分は殺されるのではないかと恐れて自分の妹だと偽りました。この欺きはゲラルの王の知るところとなり、イサクは呼び出され、叱られました。何ということをしてくれたのか！と異邦人の王に叱責され、また神に不名誉を帰すことになってしまいました。

さてその後のイサクはどうだったのかというのが今日の箇所です。まず私たちは 12～13 節を読んで驚きを感じるのではないのでしょうか。イサクがその地に種を蒔いたところ、その年に何と百倍の収穫を見ました。百倍の収穫とは、説明されるまでもなく異常な豊作です。これはただ主の恵みによることでした。13 節には「こうして、この人は富み、ますます栄えて、非常に裕福になった」とあります。なぜ罪を犯したイサクを主はこのように祝福されるのかと読む私たちは戸惑うかもしれません。しかしここに神の導きはただ恵みによるということを改めて教えられます。イサクの行いは良いものではなかったにもかかわらず、主はイサクに良くされました。イサクは神に対して真実ではありませんでしたが、主はイサクに対して真実であり続けました。前回見た 3 節で「わたしはあなたとともにいて、あなたを祝福する」と言われた通り、主はイサクにしてくださったのです。

しかしこの主の祝福がきっかけとなって問題が生じ始めます。14 節にある通り、ペ

リシテ人がねたんでイサクに執拗な嫌がらせをし始めます。神は祝福をくださいましたが、同時に試練も起こって来ました。さてそこでイサクはどのように行動したのか、が今日の箇所の大きな問いとなります。結論的に私たちが見るのはイサクは主への信仰に立って行動したということです。これは 12～13 節で主がイサクに与えた恵みが生み出した実りであったと見ることができます。ローマ人への手紙 2 章 4 節：「それとも、神のいつくしみ深さがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かないつくしみと忍耐と寛容を軽んじているのですか。」 イサクは先の失敗を通して自分の知恵と力によって自分を救い出そうとすることが何と愚かで、悲惨な結果をもたらすかを体験しました。そんな自分に対して神は約束に忠実であられて、このように祝福くださっている。この神の恵みがイサクを悔い改めに導いたのです。どんな状況でも主を見上げ、主に信頼し、主に従う道を進んで行こう！と。神の恵みは無駄にならず、むしろ神の恵みを受けて信仰の歩みにおいて前進し、成長して行ったイサクの姿を私たちはここに見るのです。

さてペリシテ人たちがしたことはイサクの祝福を妬み、彼が使う井戸をふさぐということでした。彼らはその井戸を自分たちのために奪い取ったのではなく、使えないようにするという妨害行為を行ったのです。そしてその地の王アビメレクはイサクに「われわれのところから出て行ってほしい」と言います。彼がこの地にいると争いが絶えなくなってしまう。だから出て行ってくれ！とイサクは言われます。これに対して彼はどうしたのでしょうか。17 節に「イサクはそこを去り、ゲラルの谷間に天幕を張って、そこに住んだ」とあります。彼は争いませんでした。相手の理不尽な行為を責めて戦闘状態に入ることをしませんでした。彼はこの試練の中で主に信頼して身を引き、谷間に移動しました。そしてそこにあった井戸を掘り返しました。これはアブラハムの時代に掘られ、アブラハムが使っていたものでしたが、そこもペリシテ人によってふさがれていました。イサクはそこを掘り返して、それらに父が付けていた名を同じ名をつけました。これはそれらの井戸の所有権を主張する行為であったと同時に、父アブラハムに倣って信仰の歩みをしようとするイサクの思いの現れだったと考えられます。するとそこにイサクのしもべたちは別の湧き水の井戸を見つけました。これは主の守りと支えを表すものだったと考えられます。ところがゲラルの羊飼いたちがやって来て、「この水はわれわれのものだ」と言い、イサクの羊飼いたちと争いました。そこでイサクはその井戸の名を「エセク」と呼びました。欄外の注に記されている通り、エセクは「争い」を意味します。しかしこれで終わりとはなりません。21 節

でイサクのしもべたちはもう一つの井戸を掘りましたが、それについてもまた争いが起きました。そこでその名を「シテナ」と呼んだとあります。これは「敵意」という意味の言葉です。そこで22節で「イサクはそこから移って」と記されます。ですから先の井戸は明け渡したということなのでしょう。いずれも「争った」とありましたから、最初は所有権を巡る争いはあったのです。しかし相手は少しも引きません。力づくで奪おうとします。そのような敵を前にしてイサクは交戦状態に入ることにはしませんでした。彼は身を引き、移動します。そして22節でもう一つの井戸を掘りました。この井戸については争いが起こりませんでした。敵は何度妨害しても次々に井戸を掘り当ててイサクを見て、これ以上やっても無駄だとあきらめたのでしょうか。イサクはここをレホボテと呼びました。これは「広い所」という意味です。彼は言います。「今や、主は私たちに広い所を与えて、この地で私たちが増えるようにしてくださいました。」ここに見るのは主への信仰に生きているイサクです。困難の中でも主に信頼し、ついに主の守りを経験し、主に感謝をささげています。

そして22節でベエル・シェバへと上ります。これはこの章最初に記された飢饉は終わりとなり、元の地に戻って来ることができたということなのでしょう。その夜、主が現れて、イサクに改めて約束を確認してくださいました。「わたしは、あなたの父アブラハムの神である。恐れてはならない。わたしがあなたとともにいるからだ。わたしはあなたを祝福し、あなたの子孫を増し加える。わたしのしもべアブラハムのゆえに」と。イサクはそこに祭壇を築き、主を礼拝しました。これはまさに先代アブラハムの姿とそっくりです。父アブラハムの足跡に従って歩むイサクの姿があります。

最後にもう一つのエピソードが26節以降に記されます。これも創世記21章後半に記されたアブラハムの出来事とそっくりです。アビメレクが友人のアフザテ、軍の長ピコルと一緒にイサクのところにやって来ます。何のためでしょうか。彼らはイサクと盟約を結びたいと思っていました。先にはイサクを迫害しましたが、ついにイサクを認めざるを得なくなったのです。主が彼とともにおられる。我々が何をしても彼は主によって祝福されている。そんな彼と敵対関係にあるのは得策ではない。そこで彼らは盟約を結ぶことを求めてやって来たのです。彼らは29節のように語りましたが、本当でしょうか？彼らは手出しをしなかったのでしょうか？ただ良いことだけをしたのでしょうか？平和のうちに送り出したのでしょうか？このように申し出る彼らに、イサクはどう対応すべきでしょうか。

彼は 27 節で「なぜ、あなたがたは私のところに来たのですか。私を憎んで、自分たちのところから私を追い出したのに」と一応は彼らの日和見な態度について問う発言はしています。しかしイサクはここでも平和を求める人として行動します。責めようと思えばなお相手を責めることもできました。都合の良い彼らの願い出を拒否することもできました。今や彼らよりも力ある者として、これまでの仕返しをすることもできました。しかしイサクは彼らを受け入れ、もてなし、翌朝、互いに誓いを交わします。そして平和のうちに送り出したことが 30～31 節に書いてあります。思い起こされるみことばはローマ人への手紙 12 章 17～18 節です。「だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人が良いと思うことを行うように心がけなさい。自分に関することについては、できる限り、すべての人と平和を保ちなさい。」イサクが見せたのはまさに悪に悪を返さない姿。そして自分に関することについて、できる限り、すべての人と平和を保つ姿です。彼は主に信頼し、主の恵みによって生かされていることを感謝している者として、主に喜ばれるあり方は何かを考え、この道を選んだのです。たとえすべてを計算すれば自分が損をすとしても、互いに平和の関係に歩むことを御心にかなう善ととらえて、自らもそのことを求めたのです。

最後の 32～33 節には短いエピソードがついています。ちょうどその日、イサクのしもべたちが帰って来て、自分たちが掘り当てた井戸のことについて告げました。「私どもは水を見つけました」と。これはたった今、イサクが取った行動に対する神の称賛また報いを意味する出来事だったのではないのでしょうか。イサクはアビメレクとの誓いを記念して、その井戸をシブアと呼びました。これは「誓い」という意味です。「それゆえ、その町の名は、今日に至るまで、ベエル・シェバという」とあります。この井戸はかつてアブラハムが掘ったベエル・シェバの井戸と同じもの、その再掘だった可能性があります。いずれにしても、この町がベエル・シェバと呼ばれるようになった背景には、先のアブラハムの出来事と今回のイサクの出来事の両方があるということがここに言われているのではないかと思います。

私たちは以上の箇所から何を学ぶのでしょうか。その一つは「成長する信仰」ではないのでしょうか。イサクは前回、失敗しました。不信仰の罪を犯しました。しかし彼はそこにとどまっていません。主の恵みを受けて、彼の信仰は成長しています。試練の中で、主にこそ信頼する歩みへと前進しています。詩篇 37 篇 1～4 節：「悪を行う者

に腹を立てるな。不正を行う者にねたみを起こすな。彼らは草のようにたちまちしおれ、青草のように枯れるのだから。主に信頼し善を行え。地に住み誠実を養え。主を自らの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる。」 イサクはまさに今日の箇所で行う者に腹を立てず、主に信頼して善を行い、誠実に生きました。その彼が祝福された様子を私たちは見て来ました。今年の私たちの歩みにも色々なことがあるかもしれません。ここで見たような試練が次々に訪れるかもしれません。しかしどんな試練の中でも今日の箇所のイサクのように、主に信頼の目を高く上げ、主に喜ばれる歩みへと進む者でありたいと思います。むしろ試練を通して主に対する私の信仰が成長させられて行きますように。そうしてどんな状況にあっても揺るぐことなく、主の祝福に生かされる者へ導かれたいと願います。

そして今日の箇所でイサクの信仰の表れとして前面に出ていたのは柔和という実です。詩篇 37 篇でも 11 節：「しかし柔和な人は地を受け継ぎ、豊かな繁栄を自らの喜びとする。」 誰かとの人間関係において難しい問題が生じた時、何も言わずに引き下がるのが一番良いというわけではないかもしれません。先に見たようにイサクもペリシテ人たちとの間に最初は争いがありました。またアビメレクが二人の部下を連れて盟約を求めて来た時も、なぜあなたがたは私のところに来たのかと問いました。しかしこちらが正しいとしても、その正当性を主張して相手と張り合い、相手を打ち負かす方が良いとは限りません。今日の章でイサクが見せた姿は反対です。一見、彼は負けた人のよう、押し切られた人のよう、弱い人のようです。しかしこの章全体を読み終わって思うことは負けるが勝ち！ということです。イサクは譲歩しましたが最終的に勝っています。負けたようでありながら主に信頼して生きている彼を見て、ついには相手の方が兜を脱いでイサクのところへやって来ました。「主があなたとともにおられる」と認めて彼と良い関係に歩むことを求めてやって来ました。

私たちは様々な試練において、特に難しい人間関係の中で、どのように振る舞う者でしょうか。正しいことを振りかざして相手を打ち負かすことに躍起になる者でしょうか。クリスチャンは真理を知っているからと言ってすぐに論争するとか、喧嘩っ早いとか、あの人の周りではいつも争いごとが起きていると人々から見られ、疎んじられていることはないでしょうか。そうして神についてかえって悪い証を立て、人々を救いから遠ざけていることはないでしょうか。しかし今日の御言葉から学ぶのは、主を信じる者たちにはイサクのような道があるということです。負けたようでありなが

ら神の祝福に生きる道。相手に譲歩しているのに最終的には相手に打ち勝つ道。主に信頼して穏やかに平和を求める歩みによって、かえって周りの人々の注目と尊敬を勝ち取り、神を良く証しできる道があるということです。

この年も色々なことが私たちの生活に起こると思いますが、いつも主に第一の信頼を置き、主に喜ばれる道を選んで歩む者たちでありたいと思います。そこにはイサクのように悪に悪を返さず、むしろ進んで相手に譲歩し、平和を求めて歩むことによって、かえって相手に勝ち、相手を得る道があることを覚えたいと思います。その主を信じ、主に従う道を行くことを通して、何よりも主によって守っていただく一年を過ごし、また私たちとともにいてくださる神を周りの方々に証しする歩みを祈り求めて行きたいと思います。